

# 田中秀征の

# 安倍晋三

首相

9月20日開票

# どちらが保守

# 「憂国」提言

# と石破茂

元幹事長

# が真の本流か!

自民党総裁選  
直前特集!



倉重篤郎 サンデー時評

戦後リベラルの理論的支柱ともいえる知性派、田中秀征・元経済企画庁長官が、総裁選に直言。安倍独裁によって抑え込まれたかつての良質な政治の伝統を掘り起こし、いまそれを担い得る石破茂氏に、保守本流の迫力を示せと迫った。倉重篤郎が訊く。(一部敬称略)

自民党総裁選の投票票日

(9月20日)まであとわずか。世に言われるように、安倍晋三氏が圧勝するのか。それとも石破茂氏が善戦するのか。はたまたさらなるサプライズがあるのか。日本にとっては、決定的に重要な日となるであろう。この日を迎える前に、元経企庁長官の田中秀征氏(77)に

石破茂氏(左)と安倍晋三氏。保守本流の政治を担い得るのはどちらか

総裁選もすでに終盤戦。もう逆転はない? 「万々が一の逆転がある」とすれば、小泉方式しかない、と思っている。まずは、世論を味方につけ、それを背景に自民党員を味方にして、さらにそれを背景にして国会議員を味方にする。通常とは逆のやり方だ。 2001年4月の「小泉純一郎vs.橋本龍太郎」の総裁選だ。 「小泉氏にその直後、勝因を聞いたことがある。党員にはほとんど回ってないし、国会議員対策も議員会館のあいさつ回りさえしなかった、という。やったのはひたすら街頭演説で国民世論に訴えること。自民党をぶっ壊せと。これが効いた。あるテレビ番組で、「小泉vs.橋本」の支持率の調査結果を連日発表、小泉氏がグングンと伸ばし、ついに橋本氏が一ケタにまで落ちた。これでは3カ月後の参院選

話を聞く。

氏によると、日本の戦後保守には二つの系統がある。その一つは、石橋湛山に源流を発し吉田茂、田中角栄、大平正芳、宮沢喜一らに連なる保守本流であり、もう一つは、岸信介を軸とし福田赳夫、安倍晋三につながる自民党本流である。

その違いは、まずは歴史認識に表れる。保守本流は石橋湛山に代表されるように、あの戦争を誤った膨張主義的国策によるものと明確に否定、それに代わる選択肢として小日本主義的生き方、つまり、軽軍備・通商重視の立場を取るが、自民党本流は、始祖である岸信介の満州官僚、戦時内閣の商工相であった経歴から戦中の国策の全面否定には至らず、なお大アジア的、膨張

主義的志向を残している。

外交・安保についても両者は異なる。憲法9条については、前者が護憲・軍縮的であるのに比し、後者は改憲・軍拡的であり、対米関係は、同じ同盟基軸であっても、前者には一定の距離感があるのに対し、後者には日米一体論的な従来主義の癖がある。経済政策も前者ができる限り自由経済をベースに考えようとするのに対し、後者には統制色、計画色が残る。

戦後の日本政治はこの2大潮流が、勢力的に拮抗しながら、政権を交互に担当し、バランスを取りながら、かじ取りをしてきた。そこにはそれぞれの路線の行き過ぎ、行き詰まりをけん制し、是正するシステムが内在化されていた。ところが、2000年以降、保守本流は有力な政治家の相次ぐ死、「加藤(紘一氏)の乱」の失敗で指導者を失い、急速に

勢力を弱体化させていく。

その結果、21世紀の日本政治は森喜朗、小泉純一郎、安倍晋三といった自民党本流系統の政権が十数年も続き、今回の総裁選を迎えた。田中氏からすると、この総裁選こそ自民党本流に対し保守本流が総力を結集して挑み、保守の中でのバランスを回復すべき場である。また、その絶好のチャンスでもあるはずだ。

にもかかわらず、今回もまた安倍氏ら自民党主流派が圧倒的優位と言われている。いったい、保守本流はどうなってしまうのか。以下は、元新党さきがけ代表代行として、自民一党支配を終焉させた冷戦後の政界再編で主導的役割を果たし、宮沢喜一、細川護国、小泉純一郎氏ら歴代首相の顧問格として戦後保守政治のあり方を考え抜いてきた人物による、現政局への辛口の直言である。

## 保守本流は、パワーを結集できるか

自民党が負ける。その危機感から本来、橋本氏が強かった自民党の支援組織、団体も小泉氏で動かざるを得なくなった。 世論を味方につけ、それをテコに党員票を動かした。「国会議員票も然りだ。この前の総選挙ではアンタに

石破陣営もそれを期待しているが、さすがに小泉氏にはなり切れない。 「確かに、離党経験があり自民党をぶっ壊す、とは言えない。しゃべり方も違う。つまり、可視的なもので小泉方式は難しい。石破氏は政策で勝負するしかない」 保守本流を奮い立たせる政策は? 「例えば、選挙が重なっている沖縄県知事選(9月30日開票)だ。思い切ったオール沖縄、玉城デニー側に立てば二つの選挙戦が連

たなか・しゅうせい 1940年生まれ。元経済企画庁長官。かつて政界再編をけん引した新党さきがけの理論的指導者だった。近著に『自民党本流と保守本流』

くらしげ・あつろう 1953年、東京都生まれ。78年東京大教育学部卒、毎日新聞入社、水戸、青森支局、整理、政治、経済部。2004年政治部長、11年論説委員長、13年専門編集委員

# 田中秀征の「憂国、提言」 安倍晋三と石破茂 どちらが真の保守本流か!

も解決しない。保守本流路線への転換が必要だ」

「沖繩問題」以外では?

「先の戦争は間違いだった、と歴史認識を明確にすることも論議を呼ぶし、安倍改憲に対しては真正面から反対することも大事だ。集団的自衛権の憲法解釈変更についても間違いだったと認めてほしい。要は、保守本流の立場から思い切った政策論争に踏み切ることだ。森友・加計問題も遠慮なくやってほしい」

「森友・加計問題に関連すれば、小泉進次郎氏ら若手グループの提案が光っている。国政調査権を背景に国会の議院運営委員会の元に独立した調査・提言委員会を作る、という考えだ。原発事故の際の国会事故調(黒川清委員長)がそうだった。規制すべき役所が業界の虜になってしまった、と原因を衝き、結果的に人災の側面が強かった、と言

切った。役所や業界から独立した組織だからそこまでやれた。他の問題にも援用できる。与野党が一緒にやって行政の無駄遣いをチェックする委員会を作ってもいい。石破氏もこの議論を活用する若手提言に乗り、進次郎氏と一緒にやればいい。これはウルトラCだ」

「要は、保守本流の流れに期待するパワーを集めることだ。そうしなければまた情勢は変わる」

ただ、岸田文雄氏の不出馬、安倍氏への支持表明で、せつかくの保守本流パワーが割れてしまった。

「岸田氏は判断を間違えたのではない。広島県福山市でときおり政治塾をやっているが、『広島県というのは池田勇人先生が宏池会を起ち上げ、宮沢喜一先生が中興の祖と言われた。同じ広島県選出の岸田さんはいったい何をやっているんだ』と言ったら大きな拍手

が出た。残念なことです」

保守本流勢力はなぜここまで細くなったのか。

「加藤の乱の失敗が大きかった。宏池会が加藤氏という総裁候補を失っただけでなく、四分五裂した。あれが2000年の12月だ。振り返ると、保守本流にとっては悪夢の年だった。小淵恵三(5月14日死去)、梶山静六(6月6日同)、竹下登(6月19日同)といった竹下派の有力者たちが次々に鬼籍に入り、最後は

## 自民党本流にはできない「裏安保」

さて、自民党本流にもメスを向けた。安倍政治の6年間をどう総括する?

「祖父から強運を引き継いでいる。特に経済だ。実は、さまざまな経済指標からわかることは、野田佳彦民主党政権の末期、つまり12年秋ごろはすでに日本経済は景気循環論的に言えば立ち

加藤の乱だ。宏池会が保守本流の理念派だとすれば、竹下派は保守本流の武闘派だ。本来は協力すべき両派が権力闘争でつぶし合い、保守本流という大きな塊が一気にしぼんでしまった」

その竹下派は、今回「安倍1強」政局に唯一逆戻りした。そのおかげで石破支持の参院と安倍支持の衆院側とに分断される傷も負った。竹下巨さんの判断には敬意を表する。保守本流のかぼそい炎を維持した」

直りのサイクルに入っていた。米国中心に世界経済もリーマン・ショックからの回復基調にあった。安倍政権の成立はそこに重なった」

アベノミクス、三本の矢(異次元金融緩和、財政出動、成長戦略)は政策的に必要ななかった? 「金融緩和を必ずしも異次

元化しなくても円安、株高で景気が良くなったと思う。むしろ、余計なことをしたのではない。異次元緩和を6年近く続けて、経済運営のリスクをいたずらに高

くした。しかも、その出口がいまだに見えない」

負の副産物が顕在化しつつある。地方銀行の体力低下、日銀財務の悪化、財政規律の麻痺……。

「異次元緩和をやらなかつた場合、日本経済がどうなっていたかを検証すべきだ。安倍氏はプラス要素を強調するが、それが累増するリスクを帳消しにするほどのものだったのかどうか、客観的なシミュレーションをする時期だ」

外交・安保については? 「こういうエピソードがある。池田勇人氏が田中角栄氏と大平正芳氏に『日米安保体制というのは表安保だが、君たちは裏安保をやれ』と言った、という。裏安保

り、決して蘇らない」

きちんとした総括とは?

「当時、指導的立場にあつた人たちが責任を取ることだ。そもそも責任を取って議員を辞めるべき人たちがまた指導者になっている。厳しい言い方だが、それはむしろ邪魔だ。次のものが生まれたい。だから、新たな政界再編の核は、自民党の中から出てくるのではない。僕だけでなく1993年の転換を主導した細川護国氏もそういう考えだ」

どちらが真の保守本流か。田中氏の結論は明らかである。石破氏の資質の中にそれを見いだし、そこを全開させるよう勤める直言だ

った。田中氏が最後に付言した政界再編の見立ても興味深い。いずれ自民党内が割れ、野党が連動する、という93年型再編の再来を予言したからだ。保守本流と自民党本流の闘いはそのための前哨戦かもしれない。

外交的果実をもち取った。

裏安保の最大の成功例だ。これは自民党本流の発想には全くなかった」

確かに、安倍政権は表安保に固執する。14年7月には、憲法9条を理由に禁じたきた集団的自衛権の行使について一部容認する、と憲法解釈を変えた。同盟強化策として米国側の強い意向を受けたものだ。

「安倍政権で最も遺憾に思うのは、あの閣議決定だ。二重の意味で撤回しなければいけない」

「一つは、内閣法制局が憲法解釈の変更に関わる重要な議論の経過を文書として全く残さなかったことだ。

この罪科は、僕に言わせれば財務省の決裁文書改ざんより重い。そのことで内閣法制局の権威は地に落ち存在感がなくなった。安倍政権に使い捨てられた形だ」

経済でも外交・安保でも共通点は大國志向?

「戦前は明らかに大國主義という国策の誤りがあった。保守本流はその認識から出

自国を守るために自衛隊員になった人たちに他国も守れ、と強要する重要な防衛政策の変更であるにもかかわらず、それにふさわしい国民的熟議とキメ細かい合意形成が行われてこなかった。形だけ変えたが、肝

## 政界再編の核は自民党から出る

心な国民的信頼や覚悟が詰まっていな。いざ法を執行しようとしても、必ず反対者が出る。命を懸けて出発しようとする自衛隊員にこんな失礼なことはない。ある意味では作っても適用されない空文法ともいえる」

「対抗勢力たる野党の責任はもちろん重い。何よりも、民主党が自分たちの政権の失敗を総括したかどうかだ。民主党という割れた甕がある。その破片を拾って復元しようという話だが、きちんとした総括がない限

り、決して蘇らない」